

意義ある学習を目指す授業設計のための  
自己管理用引き

L. ディー・フィンク博士  
授業開発プログラムディレクター  
オクラホマ大学  
著者

『意義ある学習体験の創出～  
大学授業設計のための統合的アプローチ』

土持ゲーリー法一・監訳  
弘前大学21世紀教育センター  
高等教育研究開発室

# 意義ある学習を目指す授業設計のための自己管理用手引き

## 目 次

序文	3
統合的授業設計の総論	4
モデル1：統合的授業設計の主要構成要素	5
統合性のある授業の設計	7
設計の初期段階：強固な主要要素の構築	7
設計の初期段階の詳細：意義ある学習を促進する授業設計	8
<u>ステップ1</u> ．状況要因	9
<u>ステップ2</u> ．学習目標	11
<u>ステップ3</u> ．フィードバックと評価手順	15
<u>ステップ4</u> ．授業／学習活動	18
能動的学習	19
豊かな学習体験	21
徹底した省察的対話	22
情報とアイデア	23
<u>ステップ5</u> ．統合	24
設計の初期段階の最終チェックと見直し	26
モデル2：授業設計評価のための基準	28
設計の中間段階：主要要素を一貫性のある総体として組み立てる	29
<u>ステップ6</u> ．授業構成	29
<u>ステップ7</u> ．インストラクショナル方略	30
<u>ステップ8</u> ．学習活動の全体計画作成	31
設計の最終段階：重要な残りの作業	34
<u>ステップ9</u> ．どのようにして成績をつけるか	34
<u>ステップ10</u> ．どんな場合に失敗するか	34
<u>ステップ11</u> ．計画内容を学生に分からせる	35
<u>ステップ12</u> ．授業の進捗状況をどのようにして確認するか	35
結論的助言	36

## 意義ある学習を目指す授業設計のための自己管理用手引き

### 序文

私たちは、授業にあたって二つの密接に関連しているが、明らかに異なる活動に深くかかわる。一つ目は、情報を収集し、どのように授業を教えていくべきか多くのことを決めながら授業設計をおこなう。二つ目は、設計した授業を実行するにあたり、教員と学生の相互関係を培う。ここで述べる教員と学生の相互関係の概念は非常に広範な意味を持ち、講義、討論の指導、実習、助言、電子メールによる伝達などを含むものである。優れた指導をおこなうには、授業設計と教員と学生の相互関係の両方において有能でなければならない。

しかしながら、これら二つの活動のうち、優れた授業設計をおこなう能力は、一般的に非常に限定的な要因である。というのは、われわれの多くが授業設計の方法についてごく限られた訓練しか受けていないか、あるいは全く受けたことがないからである。その上、過去20年ぐらいの間に大学の指導や学習に関する研究が進められ、授業設計について新しい考え方が導き出され、本質的に何が可能であるかという点でハードルを高くした。そこには、能動的学習や意義ある学習、そして教育的評価といった考えも含まれている。

大学の教員たちは、どうやってこのような概念について理解し、利用することができるか。この「自己管理用手引き」は、授業設計のための有益かつ体系的なプロセスを紹介する目的で作成したものである。これは、従来のインストラクショナル・デザインの多くのモデルに見られたものと同じ構成内容を基にしているが、それらの構成内容を直線をつなぐのではなく、相関的、一貫性のあるモデルに組み立てている。様々な利点があるなかで、このモデルは授業設計の優劣を決定するための明確な基準を提示する。

この手引きは、統合的授業設計の主要な3段階のそれぞれの段階において、導入説明、ワークシートおよびアクション問題から構成されている。

### 設計の初期段階：強固な主要要素の構築

ステップ1．重要な状況要因の確認

ステップ2．重要な学習目標の確認

ステップ3．適正なフィードバックと評価手順の作成

ステップ4．効果的な授業/学習活動の選択

ステップ 5 . 主要要素が統合されていることの確認

#### **設計の中間段階：主要要素を一貫性のある総体として組み立てる**

ステップ 6 . テーマに沿った授業構成の作成

ステップ 7 . インストラクショナル方略の選択あるいは策定

ステップ 8 . 学習活動の全体的計画作成のために授業構成とインストラクショナル方略を統合

#### **設計の最終段階：重要な残りの作業の完成**

ステップ 9 . 成績評価システムの確立

ステップ 10 . 想定可能な問題の発見・修正

ステップ 11 . 授業のシラバス作成

ステップ 12 . 授業内容および指導の評価を計画

ステップごとの導入説明を熟読し、その後でワークシートおよびアクション項目をできる限り完成させる。ある特定のアイデアについて十分理解できない場合や自身の授業にそれを適用するのが困難な場合は、まず、できることをして次に進むべきである。総じて、後に立ち戻ることが可能であり、必要なアイデアがより明確になるだろう。

この手引きでは、最初に統合的授業設計の総論を述べ、その後で主要な各段階についてひとつずつ論じることとする。

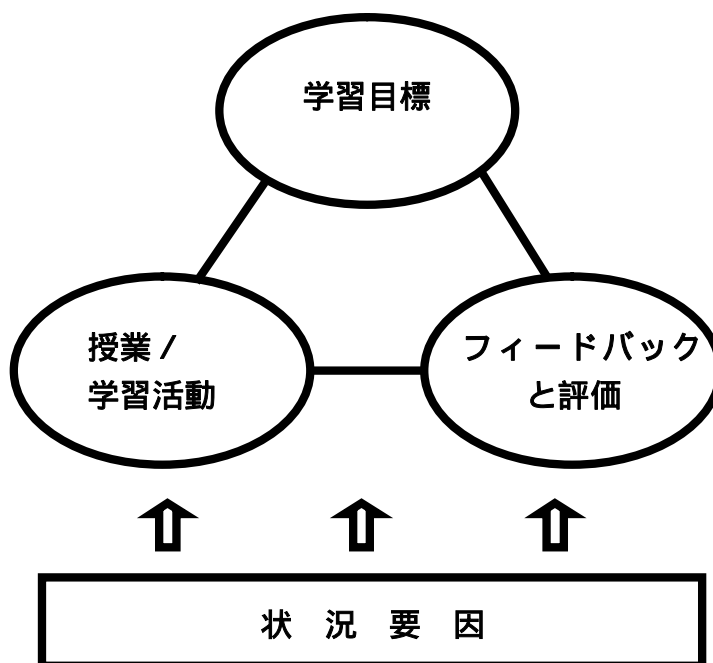
### **統合的授業設計の総論**

この統合的授業設計のモデルに示される基本的な構成要素は、その他のインストラクショナル・デザインのモデルに見られるものと同様である。すなわち、状況要因を分析し、学習目標を策定し、フィードバックと評価手順を設定し、授業 / 学習活動を選定するということである。しかし、このモデルで明らかに異なる点は、これらの要素が相関性が分かりやすく強調されるように、一緒に示されていることである。(下記のモデル1を参照)

---

## モデル1

### 統合的授業設計の主要構成要素



このモデルの利点の一つは、統合的授業の重要性を分からせることで、統合的授業か、そうでないかを見分けることができる。この点を例示するために、統合的でない、あるいは一貫性のない極端な例をあげてみよう。

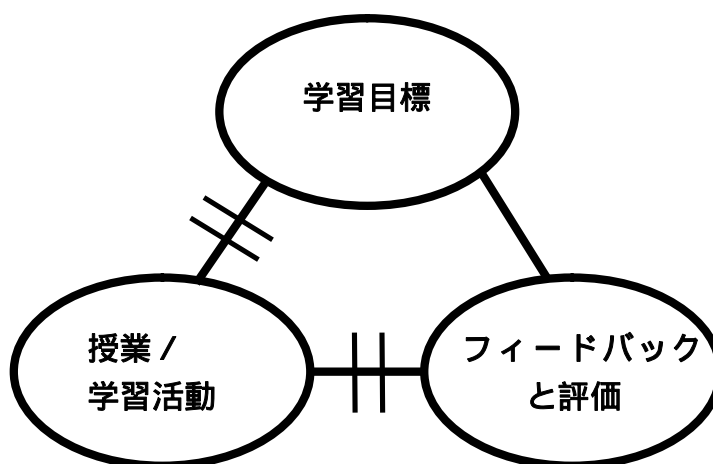
教員が学生に対し、(a)重要な内容をすべて習得し、(b)主題について批評的な考え方を学習してほしいと求める授業を想定してください。これらが学習目標である。しかし、実際の授業をみると、きわめて普通の講義形式の授業をしている（これが「授業/学習活動」である）。ここで、最初の問題が出てくる。すなわち、授業/学習活動が学習目標と整合していない。学生たちは講義から授業内容を学習することはできるかもしれないが、批評的な考え方を演習したり、フィードバックしたりすることは明らかに無理である。

ここで、教員が中間あるいは期末試験を作ろうとしたときに直面するジレンマに注目したい。教員は当然のこととして、理解や記憶による設問、すなわち内容に関連した問題を出すことはできる。しかし、考え方に関する質問を入れる

べきかどうか。

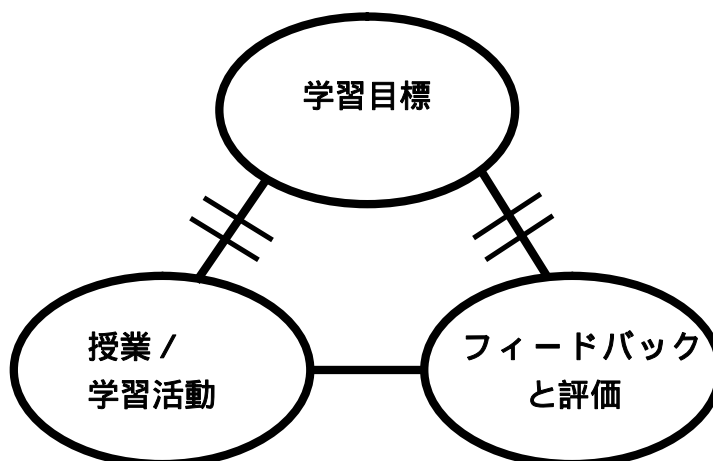
もし考え方の質問を入れるならば、授業の評価の部分は学習目標に適正につながるだろう。しかし、学生たちは批評的な考え方をするための十分な学習活動をしていないので低い評価となるだろう。それゆえに、批評的な考え方に関しては学習活動と評価との間に断絶が生じることになる。(以下の図が、このような選択をおこなった教員の状況を示している。)

### 統合性の問題：例 1



また一方、教員が試験に考え方の問題を入れないことにすると、評価は授業 / 学習活動と一致するが、学習目標とは矛盾するものとなる。(この選択は、下記の図に示される。)

### 統合性の問題：例 2



パターンに注意：教員が授業においてつながりのひとつを崩すと、必然的に、もうひとつのつながりも絶たれることになる。3つの重要なつながりのうちのふたつが崩れると、授業そのものが崩れる。それゆえに、統合性のある設計をすることが非常に重要なのである。

### 統合性のある授業の設計

授業を設計する際、われわれは情報を収集し、どのように授業を進めるか決定していく。学生たちが意義ある学習体験を得る可能性が高いものになるように、われわれはこれら両方の活動に尽力したい。そのために、われわれは体系的な方法で授業設計プロセスを遂行する必要がある。それは、各ステップを次のステップに移行する前に完遂することを意味する。後に続くステップは、それ以前のステップをもとに積み上げていくので、このことは重要である。統合的授業設計（モデル1）をおこなうためには、まず強固な主要要素を構築することからはじめる（設計の初期段階）、次にそれらを一貫性のある全体に組み立てる（設計の中間段階）、そして最終的に、いくつかの重要な作業をおこなう（設計の最終段階）。

### 設計の初期段階（ステップ1～5）：強固な主要要素の構築

統合的授業設計の主要要素は、モデル1に示されている。このモデルにおける最初の要素は、状況要因に関する情報を収集することである（例：授業の受講生は何人か、主題について学生たちは事前にどの程度の知識があるのか、など）  
[この要素はモデル1の図で「状況要因」として長方形の部分に示されている。]  
この情報は、後に授業に関する3つの重要な決定を行うために活用される。（モデル1の図において楕円形の部分）

状況要因に関する情報を収集した後、最初に決めるのは学習目標である。すなわち、学生たちに授業から何を取得してほしいかである。何が学習において重要で、コース終了から2～3年後に彼らは何を覚えておくべきか。彼らにどのような考え方や応用能力を伸ばしてほしいのか。コース終了後、彼らにどのように学習を継続してほしいのか。

「バックワードデザイン」の原理を用いて、次に、フィードバックと評価に関する決定に移る。ここでの基本的な問題点は、授業について設定した学習目標をどれだけ達成できたかを学生たちはどうやって証明するのか。これには、通常、筆記試験が用いられるが、他の方法も活用する必要があると考える。このように、授業展開の初期の段階でフィードバックと評価について取り組むこと

の利点として、学生たちが優れた発表をおこなうのに何が重要か明確になれば、効果的な授業 / 学習活動を考案するのがやり易くなる。

次に、適正かつ必要な授業 / 学習活動を策定しなければならない。意義ある学習目標と効果的な評価方法を設定したならば、授業になんらかの能動的学習を取り入れる必要があるのは当然である。

最後に、授業設計の統合性について、すべての要素が相互に整合性があり、支え合っていることを確認するためのチェックが必要である。学習活動はすべての学習目標に一致しているか。フィードバックと評価活動は、学習目標および学習活動と一致しているか。

### 設計の初期段階(ステップ1 - 5)の詳細： 意義ある学習を促進する授業設計

学生にとって意義ある学習体験ができる授業をしたいと教授が考えるならば、そのような質を授業のなかにデザインする必要がある。どうすればできるのか。下記に示すとおり、インストラクショナル・デザインプロセスの基本的な5つのステップに従っておこなう。

#### **ステップ1 . さまざまな状況要因を慎重に考察する**

- ・ 当該授業の特別なインストラクショナルチャレンジは何か。
- ・ 学生たちはこの授業に何を期待しているか。学部、組織、同僚仲間、大きく社会は何を期待しているか。
- ・ この授業は、より広範なカリキュラム枠にどう組み込まれるか。

#### **「バックワードデザイン」プロセスを活用する**

このプロセスは、学習プロセスの最終点からスタートし、「終わり」からはじめに向けて作業する。以下の重要な決定をおこなうには、状況要因(上記ステップ1)の情報を活用する。

**ステップ2 . 学習目標** 授業終了までに学生たちに何を習得し、数年後まで持ち続けてもらいたいのか。

- ・ 「理解と記憶」を中心とした学習を超えて広範に考える。
- ・ 提案：「意義ある学習」のための分類図(図1)を枠組みとして活用する。



**ステップ3 . フィードバックと評価手順** 学生たちは学習目標を達成したことを証明するのに、何をしなければいけないか(上記ステップ1に同じ)

- ・ 授業の成績をつける根拠とする一方で、学生たちの学習を助けるのに何ができるか考える。
- ・ 提案：「教育的評価」概念で思考する。

**ステップ4 . 授業/学習活動** フィードバックと評価活動において優秀であるために、学生たちにとって授業中にどんなことが必要であるか。

- ・ より広範な学習目標をサポートするように「学生たちを巻き込む」方法を創造的に考えること。
- ・ 提案：「能動的学習」活動を活用する。特に以下の点に関連して、
  - ・ 学生たちが同時に数種類の意義のある学習を達成できるような「豊かな学習体験」を経験させる。
  - ・ 学生たちに何を学習しているのか、どのように学習しているのか、そして学習内容の意義について思い巡らせ、熟考させるような「徹底した省察的対話」の機会を与える。
- ・ 提案：さまざまな活動を効果的なインストラクショナル方略、すなわち、相互依存的学習活動のシーケンスで一貫性のある授業構成に組み立てる。

**ステップ5 . 必ず主要な要素はすべて統合されていること**

- ・ 主要な要素(ステップ1 - 4)はすべて一貫性があり、それぞれが支え合っていることを確認するためにチェックする。

**ステップ1 . 状況要因**

授業設計をおこなうにあたり、最初にすることはていねいに現状を把握することである。それは、授業および学習状況についてすでに分かっている情報を検討し、場合によっては、さらに追加情報を集めることである。これらの情報は、授業に関する重要な決定をおこなうために活用する。

授業に影響を及ぼす可能性のある重要な状況要因がいくつかある。考察に役立つと思う一般的分類を以下に示す。

- ・ 授業/学習状況の特殊な事情
- ・ 学習状況の一般的事情
- ・ 教科の性質
- ・ 学習者の特性
- ・ 指導者の特性

特殊な背景的要因は、常に重要である。その他の要因は時として重要であるが、

そうでないときもある。しかし、それらすべてについて検討することは常に有用である。

一般的分類（および各分類項目に関連する特別な要因）は、ステップ1のワークシートに示されている。当該授業に関連して、これらの要因のそれぞれについて再検討する。そして、いずれかの要因について情報があれば記入する。情報はないが重要かもしれないと考えるなら、どのように情報を入手できるかアイデアを記入する。

## **ステップ1．ワークシート** **考慮すべき状況要因**

### **1．授業 / 学習状況の特殊な事情**

授業には何人の学生が受講するのか。授業は下級生対象か、上級生対象か、大学院生レベルか。教室の授業は、どれだけの時間および回数おこなわれるのか。授業はどのような形式でおこなわれるのか。実演か、オンラインか、あるいは教室か実験室か。学習環境としてどのような物理的要素が授業に影響を及ぼすか。

### **2．学習状況の一般的な事情**

この授業またはカリキュラムに対してどのような学習の期待が持たれているか：大学、カレッジ、および / または学部から、同僚仲間から、社会から。

### **3．教科の性質**

教科は主として理論的か、実践的か、あるいはその組み合わせか。教科は主として、一点集中的か、多岐に分かれているのか。領域内で重大な変化や論争が発生しているか。

### **4．学習者の特性**

学習者たちの生活状況はどうか(例えば、就業、家庭、職業の目標)。この教科に対して、学生たちは通常、どの程度の事前の知識や経験を持ち、どんな最初の感情を抱いているのか。彼らの学習目標、期待、および好まれる学習形態はどうであるか。

### **5．指導者の特性**

教員は授業および学習について、どんな教育信条や価値観を持っているのか。教員の心構えはどうであるか：教科に対して、学生に対して。教員はこの教科についてどの程度の知識があり、精通しているのか。教員の指導における強み、長所は何か。

## **ステップ2 . 学習目標**

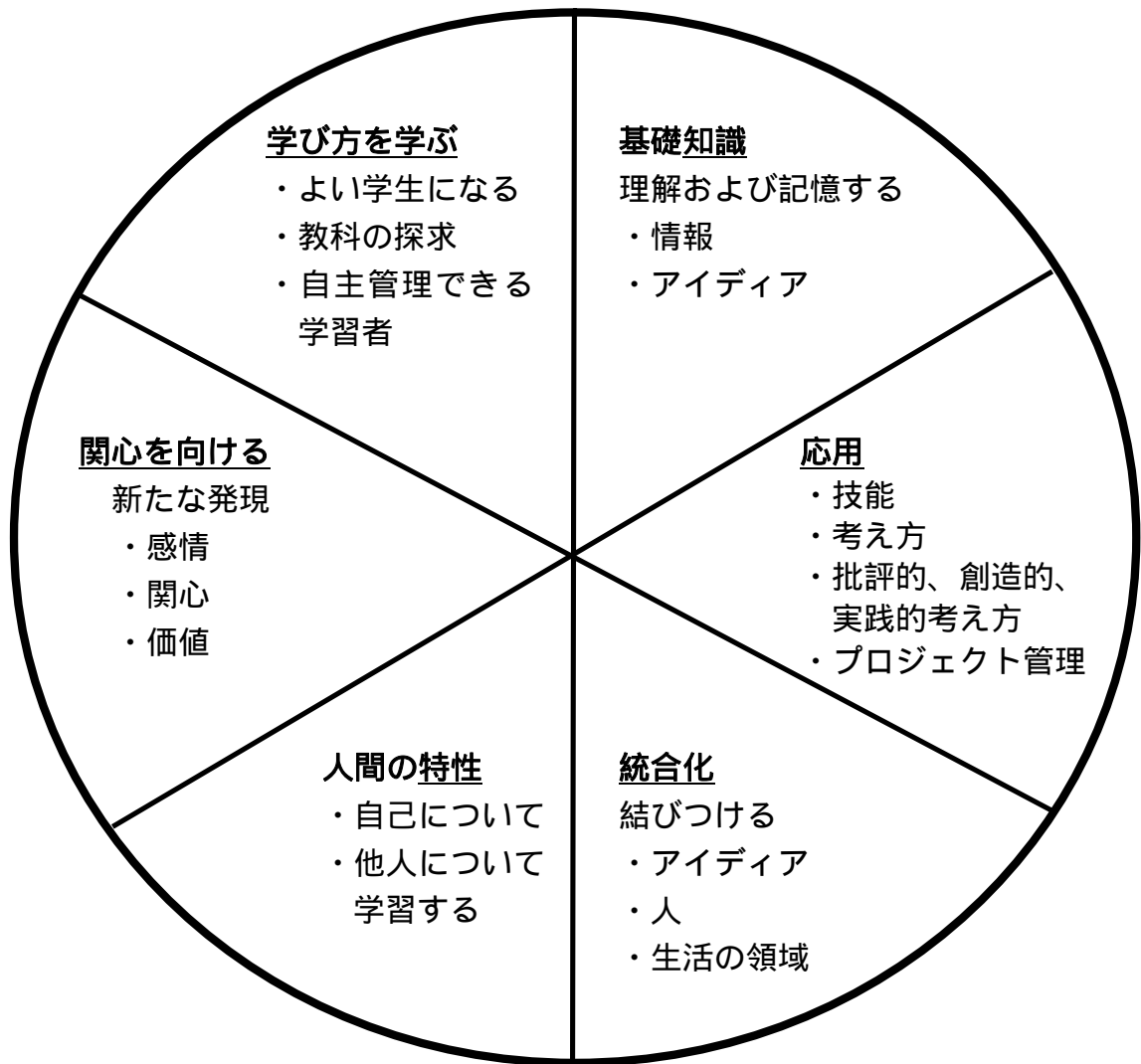
状況要因を見直した後、次に学生たちに授業で何を学び取ってほしいかを決める。多くの人が、この作業で内容中心のアプローチを選択する：“学生にはトピック X、トピック Y およびトピック Z について学習してほしい。”これが簡単で自然なアプローチではあるが、大抵の場合、“理解と記憶”型の学習を過度に強調する結果となる。これらは重要なことである。しかし、教員が学習中心のアプローチを取るならば、追加的に幾種類かの意義ある学習も必要と認めるのが普通である。

教員に次のように自問してみようことを勧める：コース終了後2-3年経った頃、この授業が学生たちにどんな影響を与えることを望むか。この授業を受けた学生と受けなかった学生の違いは何か。

学生と教員が、真に意義ある何を学生が学ぶべきかについて考えるとき、通常、彼らの答えに“理解と記憶”型の学習も含まれるが、それだけに集中することはない。ほとんどの場合、彼らは、批評的な思考や授業で得た知識の創造的な活用の仕方、現実社会の問題解決を学ぶことや自分自身や他人に対する考え方を変えること、生涯学習の重要性に気づくことなど、これらを重視することが多い。

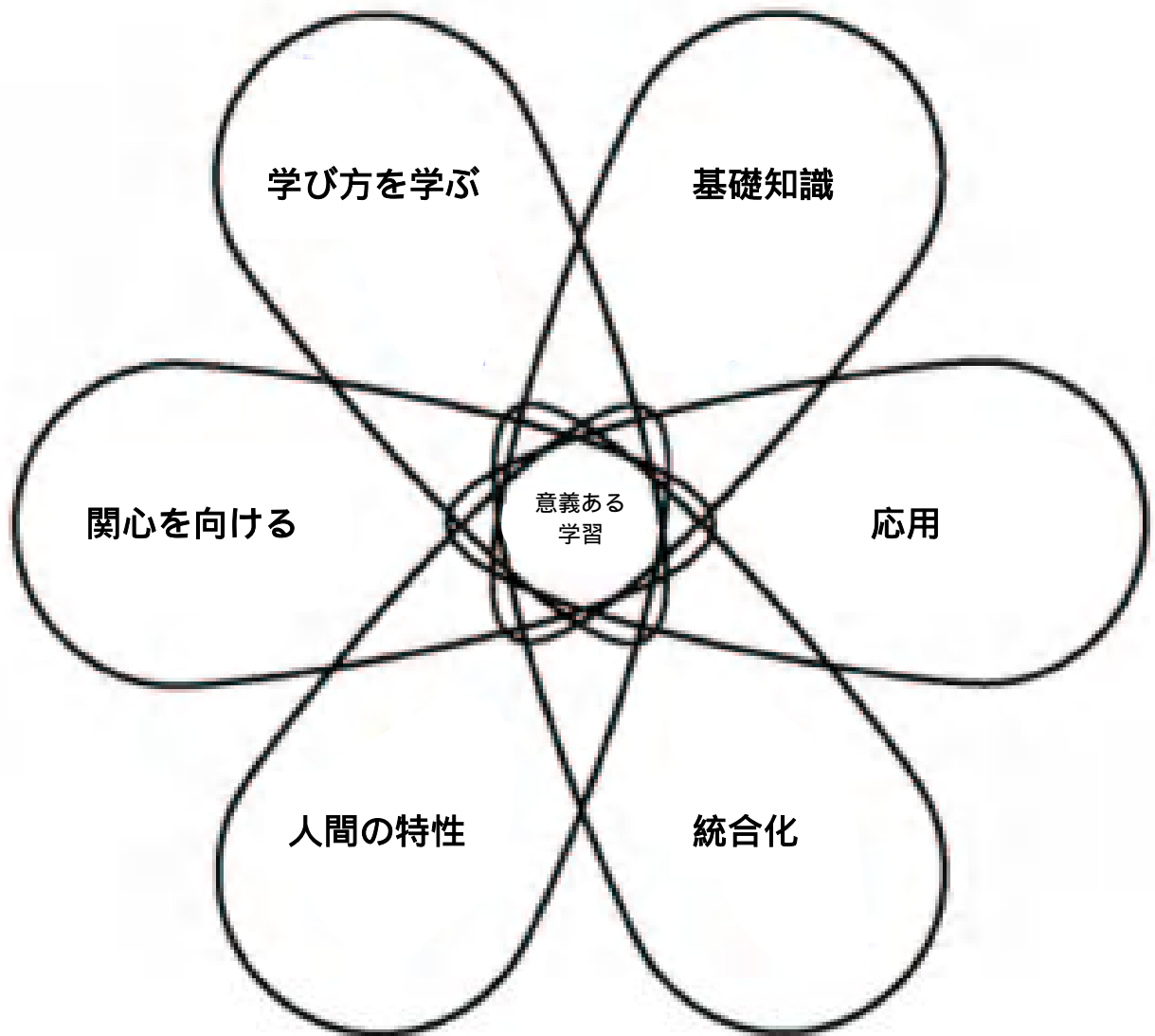
意義ある学習の本質とは何か、という問いに対する人々の反応を長年にわたって研究してきた結果、私は意義ある学習の分類図を提案している。これは、6種類の主要な意義ある学習形態で構成されており、さらに多数の下位範疇がついている。この分類法は、次のページの図1に示されている。この分類図は、重要な学習目標として授業に加えたいと思われるような意義ある学習形態を定めている。

図1  
意義ある学習の分類図



この特殊な分類法の重要な特徴は、次のページの図2に示されているように、それぞれの種類の学習が相互に作用していることである。これは、それぞれの種類の学習が他の種類の学習を刺激することを意味する。これは、あなたの授業の学習目標を選定するのに重要な影響を与えるだろう。意義ある学習の6種類すべてを入れるのは負担が重過ぎると感じるかもしれない。しかし、現実には、より多く入れるほど、それぞれの学習目標が相互により大きく支えあって学生たちの学習がより高い価値あるものとなるだろう。

図2  
意義ある学習の相互作用の特質



## ステップ2 . ワークシート

### 意義ある学習目標策定のための質問

“ この授業終了後、1年(あるいはそれ以上)経過したとき、私は学生たちに次のことを求め、望む \_\_\_\_\_ ”

#### 基礎知識

- \* 学生たちが今後理解し、記憶するのにどんな主要な情報(例、事実、用語、公式、概念、原理、関係性など)が重要であるか。
- \* 学生たちが、この授業を理解するのにどんな主要なアイデア(視点)が重要であるか。

#### 応用目標

- \* 学生たちは、どんな考え方を学習することが重要であるか。
  - ・ 批判的思考方で、学生たちは分析や評価をおこなう
  - ・ 創造的思考方で、学生たちは想像や創造をおこなう
  - ・ 実践的思考方で、学生たちは問題を解決し、決定をおこなう
- \* 学生たちは、どのような重要な技能を習得する必要があるか。
- \* 学生たちは、複雑なプロジェクト管理の仕方を学習する必要があるか。

#### 統合目標

- \* 学生たちはどんな関連性(類似性や相互作用)を認知し、結びつけるべきか。
  - ・ この授業の範囲内のアイデア間で。
  - ・ この授業の範囲内の情報、アイデア、視点、および他の授業や領域における情報、アイデア、視点では。
  - ・ この授業の範囲内の材料や学生自身の個人的、社会的および/または仕事生活では。

### 人間の特性の目標

- \* 学生たちは、自分自身について何を学ぶべきか
- \* 学生たちは、他人に対する理解や他人との相互関係について何を学ぶべきか

### 関心を向ける目標

- \* 学生たちにどのような変化や価値観を取り入れてもらいたいのか。  
感情  
関心  
アイデア

### 学び方を学ぶ目標

- \* 学生たちに何を習得してもらいたいのか
  - ・ どうすればこのような授業で優秀な学生になれるか
  - ・ この授業の特定教科についてどのように学習するべきか
  - ・ どうすればこの教科の自主管理できる学習者になれるか、すなわち、自分が何を学習するべきか、学習したいかについて学習予定をたてて、学習の計画を持つことである。

### ステップ3：フィードバックと評価手順

内容中心の授業では、通常、学生が習得できたかどうかを教員が評定するのに、学期途中で2回の間中間試験と最終試験で十分なフィードバックと評価であると考えられている。しかし、学習中心の授業の場合は、もっと工夫したアプローチが授業設計のこの部分に求められる。まとめて“教育的評価”として知られているフィードバックと評価手順の組み合わせが、(単に、教員に成績をつける基準を提供するためにデザインされている)“監査的評価”を超えて必要とされる。実際に、教育的評価は学生の学習の質を重視している。後のページの図3に、教育的評価の4つの主要要素がより伝統的な監査による評価と対照的に示されている。

将来を考えた評価には、演習、質問、および/あるいは、与えられた課題や問

題、決定事項に対して現実的状況を作り出す問題を組み入れている。この種の設問や問題を組み立てるには、教員はコースが終了した後の将来のことを考えて問いかける必要がある。「自分はどのような状況下で学生たちがこの知識を活用すべきか、また活用できることを期待しているのか」。それから、できるだけ現実の近い状況を再現する質問や問題を作る。また、問題は多少自由形式にして、事前に完全に組み立てられていないようにすべきである。学生たちの回答の質を評価できるように、必要に応じて何らかの前提条件や制限を与えることも可能である。

この特徴を説明するために、かつて私が世界地理を教えたことがある授業で、学生たちが例えば東南アジアについて1単位学習した例をあげてみよう。時代遅れの評価方法では、学生たちにその地域の国々の人口や資源にどんな相違があるか質問するだろう。将来を考えた評価の質問では、学生たちにその地域で会社を設立しようと考えている企業で自分が働いていると想像してもらう。企業側は、どの国に必要な政治的安定性や製品に対する購買力や経済成長の見込みがあるのかなどについて、学生たちの意見を求める。このような質問であれば、学習したことを実際に活用できる状況を想像するように学生たちに求めるのである。

教員は、学生の学業を評価するのに用いられる評価基準を明確に説明すべきである。教員は次の問いを自らに問いかけた後、学生たちとも話し合う必要がある。“この領域で質の高い仕事とは、一般的にどんな特徴や特性があるのか。”それらが評価の基準である。さらに、基準のひとつひとつについて合格と認められたり、特に優秀であると評価されたりするには、どのくらい優れた学業が求められるのか。これに対する答えが教員の評価基準を示すものである。

教員が、学生に自己評価をさせる機会を与えることも重要である。人生において後日、学生たちは自分自身の能力を自己評価する必要が生じるだろう。ゆえに、授業を受けている間に評価の仕方を学びはじめるべきである。授業で最初はこのグループで行い、後に個人でさせてもよい。それとあわせて学生たちは、自分の学業を評価、判定するための適正な基準を作成し、論議することも必要である。

学生たちがどのように能力を発揮すべきか学習に努める一方で、教員はフィードバックをする必要がある。質の高いフィードバックは、“忠実(FIDeLity)”フィードバックの特徴を備えている。すなわち、



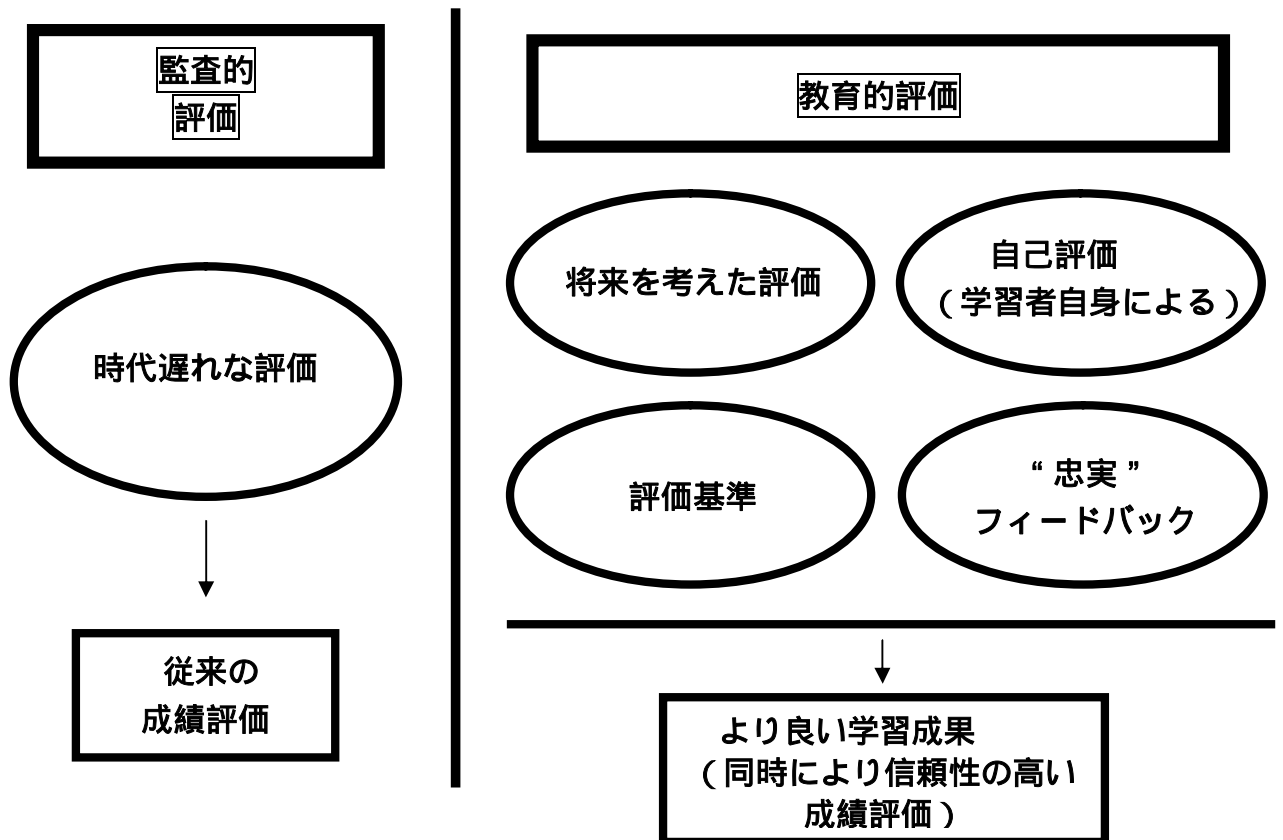
- Frequent (頻繁に) : フィードバックを毎日、毎週、あるいは、できるだけ頻繁におこなう
- Immediate (迅速に) : できるだけ迅速に、学生にフィードバックする
- Discriminating (区別する) : 学業の不合格、合格、優良の違いをはっきりさせる
- Loving (愛情) : フィードバックするのに共感を示す

質の高いフィードバックによる学習を重視する

私が本を出版した後に、スコットランドとイギリスの教育者グループが、学生の学習を重視した方法でフィードバックするために7つの原理を非常に印象的なリストにまとめた。7つの原理は、この手引きの付録に加えている。

注：重要な部分は13ページであるが、全文はウェブサイトからダウンロードできる。このウェブサイト URL は付録に載せている。

図3  
監査的評価と教育的評価



## ステップ3 . ワークシート

### 教育的評価の手順

#### 1 . 将来を考えた評価

将来を考えた評価の考え方を一つか二つ作成する。学生たちが学習したことを活用できるような状況を見つけ、その状況を質問、問題あるいは課題と合わせて再現するように努める。

#### 2 . 評価基準

主要な学習目標の一つを選び、できの悪い業績と優秀な業績を区別できる基準を少なくとも二つ定める。次に、それぞれの基準に対して、2 - 3 のレベルのスタンダードを書く。

#### 3 . 自己評価

学生たちに自分の成果を自己評価させるためにどんな機会を与えることができるか。

#### 4 . “忠実 (FIDeLity)” フィードバック

学生たちに以下に述べるようなフィードバックをおこなうには、どんな手法を展開できるか。

Frequent 頻繁に

Immediate 迅速に

Discriminating 明確な標準 & 基準に基づき区別する

Lovingly 共感を込めてフィードバックする

## ステップ4 . 授業 / 学習活動

大学の教員たちは授業で何をおこなうべきか考える時、伝統的な形の“講義と討論”をおこなってきた。授業によっては、講義に重きを置いているものもあるし、討論をより重視していることもある。しかし、ステップ2で提唱したような意義のある学習をおこなうためには、新しいツールや、新しい種類の授業と学習活動が必要となるだろう。それらはどこで見つけることができるか。われわれは、いかにしてより能動的な学習を授業に取り入れるべきか、理解し、習得する必要がある。

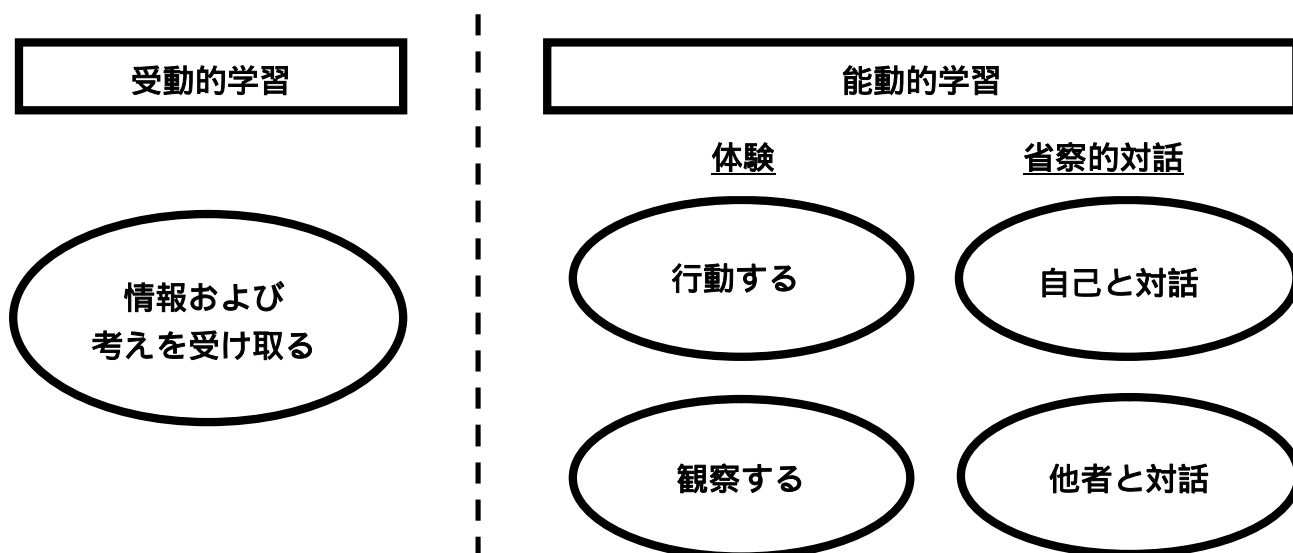
### 能動的学習

大学の授業に関する文献で、過去10年あまりの間により力強く提唱されてきた考え方は、能動的学習の概念である。本質的に、能動的学習の概念は、「学生たちは受動的よりも能動的な方法で学習したほうが、より多く学び、学習したことをより長く持ち続けることができる」のを証明する研究を支持している。

能動的学習とは、何を意味するのか。能動的学習の支持者であるボンウェルとアイソン(1991)は、能動的学習のことを“学生たちが行動しながら、していることについて考えるように引き込む”と表現している。“行動する”ということで彼らはディベートやシミュレーション、指導によるデザイン、小グループの問題解決、ケーススタディなどの活動に言及している。この定義を私流に表現したのが図4である。学生たちは、講義を受講したり、教科書を読んだりする時は、“情報や考え方”を受け取っているものであり、学習過程で重要な部分ではあるが、比較的受身な方法である。学習をより能動的にするには、なんらかの体験的学習や省察的対話の機会を加えることによって、全般的学習体験をいかに高めることができるかを習得する必要がある。

図4

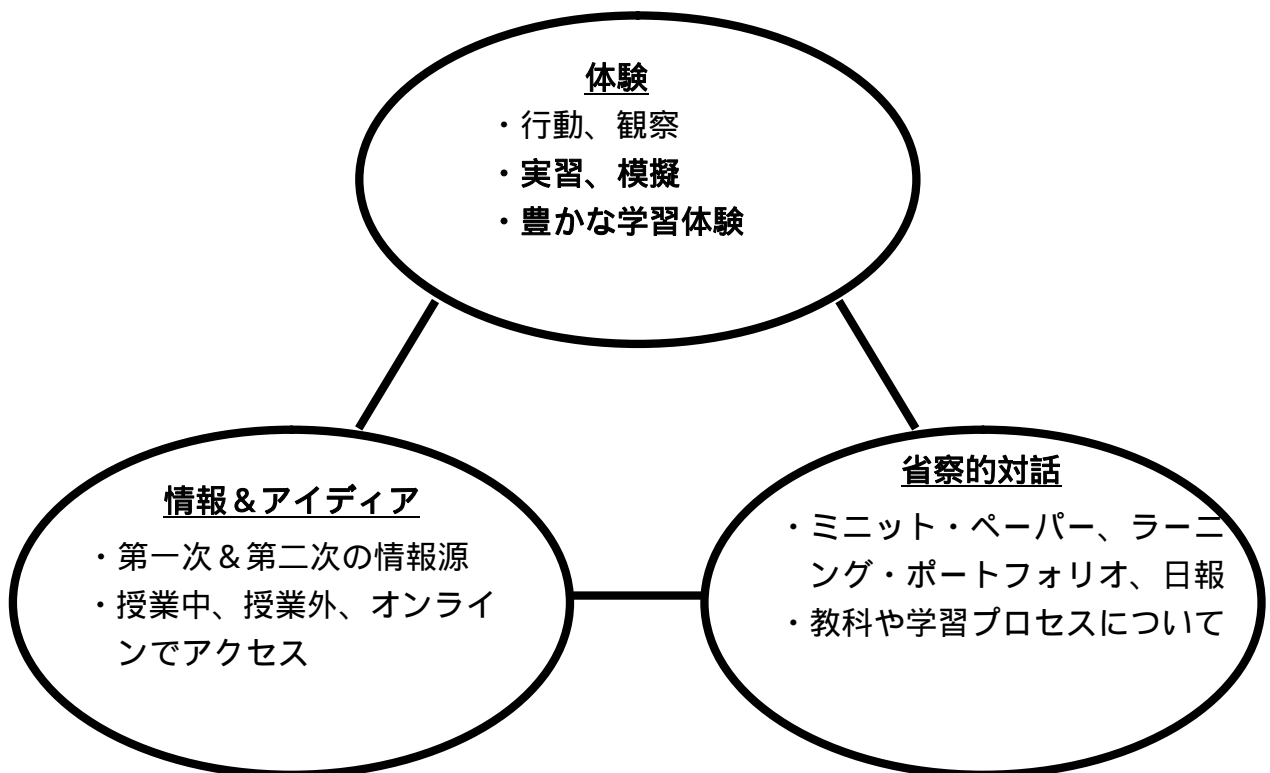
### 受動的学習と能動的学習の最初の比較



### “能動的学習”の拡大した見方

意義ある学習の達成を可能とする完全な学習活動の組み合わせを作成するには、能動的学習について範囲を拡大した、もっと全体的な視点が必要である。それは“知識やアイデアを得る”だけでなく、“体験”や“熟考”も含むものである。図5で新しく概念化した能動的学習を図示しており、3つの学習モード全てがより完成度の高い学習活動の組み合わせに不可欠な部分となっている。

図5  
能動的学習の全体像



学習活動を選択するのに、2つの原則が指針となる。一つは、効果的な学習活動の組み合わせには、次にあげる能動的学習の3種の構成要素：すなわち、情報&アイデア、体験、省察的対話の各要素から活動が含まれていることである。二つ目は、可能な限り直接的な学習活動を見出す努力をするべきである。間接的あるいは想像的なやり方も場合によっては必要である。しかし、能動的

学習ができる直接的な方法があれば、学生の学習の質を高めることができる。

私自身の経験や、この能動的学習の全体像に関して有能な教員が実際に何をしているかについて書かれた文献を読んでみて分かったことは、優れた教員は、能動的学習の3つの構成要素全てをさまざまな方法で取り入れているということである。表1で示すとおり、教員たちは情報やアイデア、体験および省察的対話を直接的に提供するときもあるが、間接的に、あるいはオンラインでおこなうときもある。

表1 全体的・能動的学習のための学習活動

	情報 & アイディア を得る	体験		省察的対話:	
		実習	観察	自己	他者
直接	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第一次データ</li> <li>・ 第一次情報源</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本物の設定で実習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現象を直接観察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 省察的熟考</li> <li>・ 日誌</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対話 (授業内 授業外)</li> </ul>
間接 想像的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第二次データと情報源</li> <li>・ 講義、教科書</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事例研究</li> <li>・ ゲーム、シミュレーション</li> <li>・ ロールプレイ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ストーリー (フィルム、口述歴史、文献にアクセス可能)</li> </ul>		
オンライン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業ウェブサイト</li> <li>・ インターネット</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先生が学生に_____の直接体験を課題として与えることができる。</li> <li>・ 学生はオンラインで間接的体験ができる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生は考察し、その後オンラインで多様な対話に関わる事ができる。</li> </ul>	

学生たちのために、より確かな学習体験を展開できる方法を探るのに役立つように、豊かな学習、徹底した省察的対話、そして情報とアイデアという三種の能動的学習活動のそれぞれにいくつかのアイデアを提案する。

**豊かな学習体験** 学習体験に経験的要素を加えようとするならば、“豊かな学習体験”を求めるべきである。ある種の学習体験は、学生たちが同時に幾種類もの意義ある学習を習得することができるので“豊か”である。これが可能となるのはどのような方法であるか。以下に、複数の種類の意義ある学習を同時に推進できる活動内容を授業内と授業外に分けて表示する。

<p><b>授業内：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ディベート</li> <li>・ ロールプレイ</li> <li>・ シミュレーション</li> <li>・ ドラマ化</li> </ul>	<p><b>授業外：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ サービス・ラーニング</li> <li>・ 状況観察</li> <li>・ 真正なプロジェクト</li> </ul>
--	--

**アクション** 学生たちに“実習”あるいは“観察”を体験させるような授業に加えるべき学習体験を見つける。どんな“豊かな学習体験”があなたの授業に適しているか。

**徹底した省察的対話** 能動的学習のもうひとつの重要な要素は、学生たちに学習体験の意義について熟考する時間と激励を与えることである。省察的対話には多様な形態がある。(次の表2を参照) (日報や日記に書き込む場合のように)自分自身で熟考することもできるし、(教員や他の人との討論の場合のように)他者と意見を交換することもできる。もう一つの重要な区別は、主題について論じる実体的文書(例えば、典型的な学期末レポート)と自分の学習について述べる省察的文書とのちがいである。省察的文書においては、学生たちは、自分は何を学習しているのか、自分が学習していることの価値は何か、どのように学習しているのか、この他に学習する必要があるか、など異なる種類の質問について意見を述べる。

**表2**  
**徹底した省察的対話**

**対話の相手は誰か**

- ・ 自分自身 (学習日記、ラーニング・ポートフォリオ)
- ・ 他者 (教員、他の学生、教室外の人々)

**何について**

- ・ **授業に主題について**（実体的文書）
  - この概念または話題について適正かつ十分な理解とは何か。
- ・ **学習プロセスについて**（省察的文書）
  - ・ 自分は何を学習しているのか
  - ・ この学習の価値は何か
  - ・ どのように学習したか：最良、大変快適に、難解、など
  - ・ この他に何を学習する必要があるか

### 文書の形態

- ・ ミニット・ペーパー
- ・ 学習週記
- ・ ラーニング・ポートフォリオ（授業最終、プログラム最終）

---

大学の授業に関する文献によると、省察を促進するための多様な手法が確認されている。ミニット・ペーパーでは、教員が学生たちに1週間に一度か、クラスの終わりに、短い焦点を絞った質問を与えて答えさせる。質問の例として、“今日学習したことで最も重要なことは何か。この授業で最も分かりにくい点は何か。”さらに望むべきは、学生たちに学習の週報を書く練習をさせることである。彼らに、学習体験について定期的に省察するように求める。前述の表に示した4つの質問や、(あるいはもっと限定的な質問)をすることで学生の省察努力を手引きする必要もあるだろう。

もう一つの優れた実践方法は、学生たちにコースの最終でラーニング・ポートフォリオをまとめさせることである。これは、8 - 12 ページの物語風作品とその内容を補足・説明するための資料の付録である。物語風作品には、学生が学習体験に関する省察内容を記述し、前述した質問などについて再度意見を述べる。

**アクション**：どのような省察的対話を授業に組み込むことができるか。

**情報とアイデア** 授業時間の一部を前述のような体験や省察的活動のために自由に活用するためには、授業に関する重要な情報やアイデア、すなわち授業内容を学生たちに紹介するための別の方法を見つける必要が生じるだろう。それには、授業に出席する事前にもっと文献を読んでこさせることが必要な場合もあるかもしれない。あるいは、授業専用のウェブサイトを開設し、内容に

関連した資料を掲載することもありうるだろう。もしくは、授業に関連した優れた内容を載せている選定したウェブサイトを見るように学生たちに指示を与えることもできる。

**アクション：**講義をおこなう以外に、学生たちにどのような方法で主題の課題や考え方に早期に触れる機会を与えることが可能であるか(できれば授業外で)

## **ステップ5 . 統合**

これまでの設計の初期段階(ステップ1 - 4)において、授業設計のための強固な主要要素を構築してきた。この初期の段階を完成するには、これら4つの要素がどのように適正に調整されているかチェックする必要がある。ステップ5のワークシートで、これら4つの要素のそれぞれがどのように互いに統合されるべきかを詳細に説明する。

### **ステップ5 ステップ1 - 4を統合する**

#### **1 . 状況要因**

- ・ 状況要因を丁寧かつ徹底的に検討する作業は完了していると仮定して、それらの状況要因が学習目標、フィードバックと評価、学習活動を決める際にどのようにうまく反映させているか。
- ・ どんな潜在的矛盾が問題を引き起こす可能性があると考えられるか。
- ・ あなたの教育信条や価値観、学生の特徴、特別または一般的事情あるいは主題の本質とあなたが授業の進め方として提案するやり方には何らかの不一致があるか。

#### **2 . 学習目標およびフィードバックと評価**

取り組むべき問題：

- ・ 評価手順がどの程度十分に学習目標のすべての範囲を網羅できるか。
- ・ フィードバックで学生たちに学習目標のすべてについて情報を提供しているか。
- ・ 学習目標には、学生たちが自分の学業の評価方法を学ぶのを手助けすることも含まれているか。

#### **3 . 学習目標および授業 / 学習活動**

- ・ 学習活動はすべての学習目標を効果的にサポートしているか。



- ・ 主要な学習目標のいずれにも役に立たない不適正な活動はないか。

#### 4. 授業 / 学習活動とフィードバックと評価

- ・ 学業を評価するのに活用する評価基準を学生たちが理解する準備として、フィードバックの繰り返しが如何にうまく役立つか。
- ・ 実践的学習活動や付随するフィードバックの機会が、学生たちにとって最終的評価活動のための準備として如何にうまく役立つか。

統合性に関して、特に上述のステップ 2 - 4 についてチェックするのに良い手法は、次のページのワークシート 1 を活用することである。最初に、授業の学習目標を表に記入する。できれば、分類表に示された意義のある学習のそれぞれの種類について、ワークシートを 1 枚用意する。二番目に、主要な学習目標のそれぞれについて、学生がしかるべき学習を達成できたかどうかを知る方法を確認する。すなわち、どんな種類のフィードバックや評価を使うことができるか。三番目に、再度、主要な学習目標のそれぞれについて、学生がしかるべき学習を達成するために何をする必要があるのであるのか確認する。評価と学習活動が同一であるか、非常に類似していることに気づくことがよくある。

しかし、この課題に取り組むことは、学習目標のそれぞれについて実際に明確な評価方法および学習活動が設けられていること、そして口先だけで言うのではないことを確かめることができ非常に有益である。

(後述の)最終チェックを完了したら、次に、それらの数種類の活動を一貫性のある総体に組み立てるプロセスをスタートすることができる。(31 頁 から始まる第二段階)

ワークシート1  
授業設計のためのワークシート

授業の学習目標	この種の学習の 評価方法	実際の授業 学習活動	有益な資源 (例：人、もの)
1.			
2.			
3.			
4.			
5.			
6.			

**設計の初期段階の最終チェックと見直し**

このモデル計画の主な利点は、授業設計の質を評価するための明確な基準を定めることである。5つの主要基準があるが、そのうちの4つを後のページの図6に、太字、太枠で強調した部分で示している。これによると、優れた授業設計は次の基準を満たしている。

次の条件を含んでいるならば、授業の基本的な設計は合格である。

**1. 状況要因の徹底的な分析**

授業の状況的制限や機会をはっきりさせるために、主要な状況要因のすべてを系統的な見直しに基づいて分析している。

## **2 . 意義ある学習目標**

単に“理解と記憶”といった学習だけでなく、幾種類かの意義ある学習に焦点を合わせた学習目標を含んでいる。

## **3 . 教育的フィードバックと評価**

次にあげる教育的評価の要素を含んでいる。将来を考えた評価、学生たちが自己評価できる機会、明確な評価基準、そして“忠実(FIDeLity)”フィードバック。これらが、監査的評価の域を超えたフィードバックおよび評価を可能とする。

## **4 . 能動的な授業 / 学習活動**

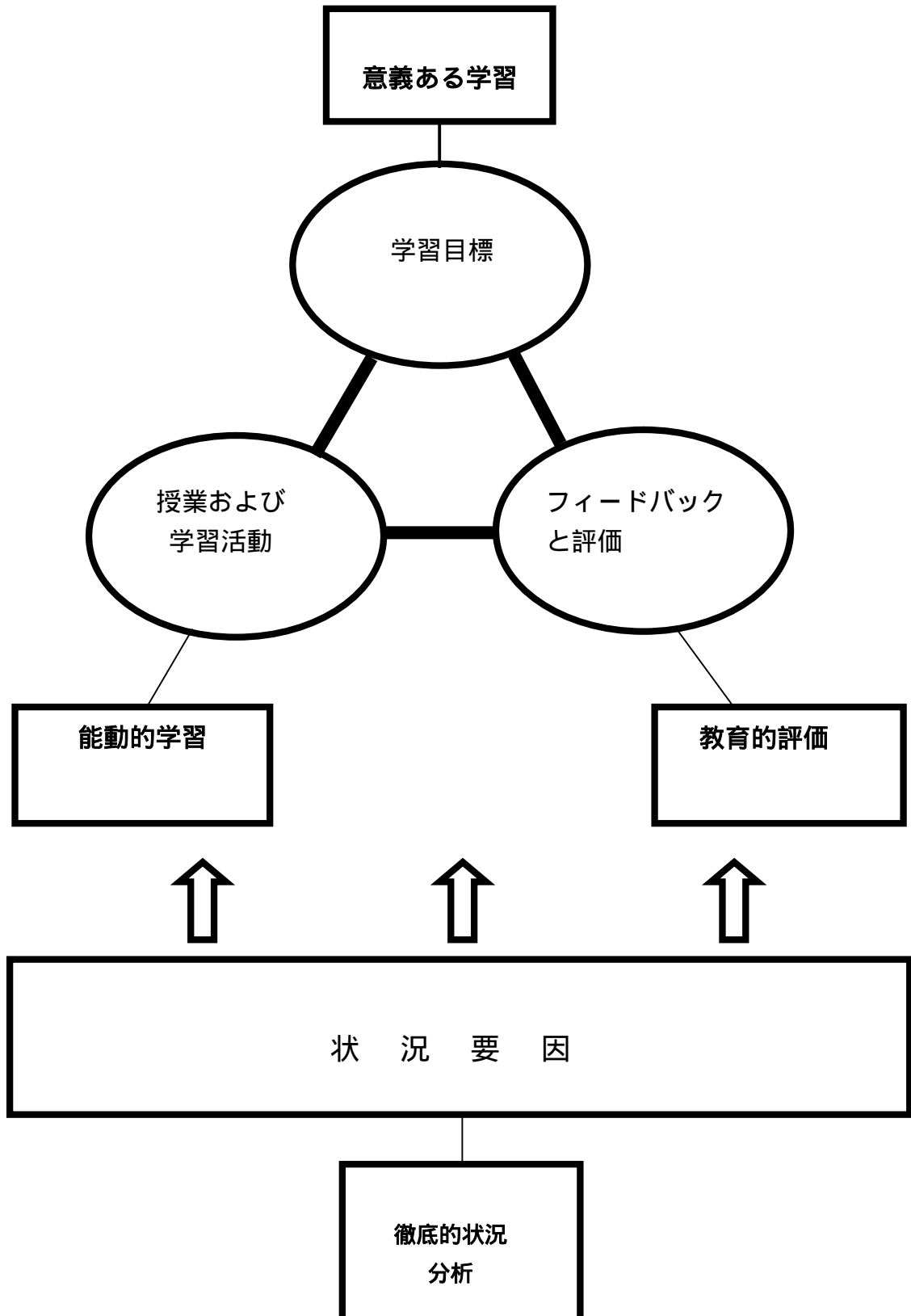
基礎的情報やアイデアを習得する方法と合わせて、効力のある形で体験的、省察的学習に取り組むことによって、学生たちに能動的学習を体験させるような学習活動を含んでいる。

## **5 . 統合 / 調整**

授業の主要要素がすべて統合されている(あるいは調整されている)。すなわち、状況要因、学習目標、フィードバックと評価、授業 / 学習活動のすべてがそれぞれ互いに影響し、支えている。

授業設計が、これら5項目の基準のそれぞれについて高い評価を得るならば、優れたデザインの基本的要素が備わっているといえる。

図6  
授業設計のための評価基準  
(主要な標準は太枠、太字で示されている)



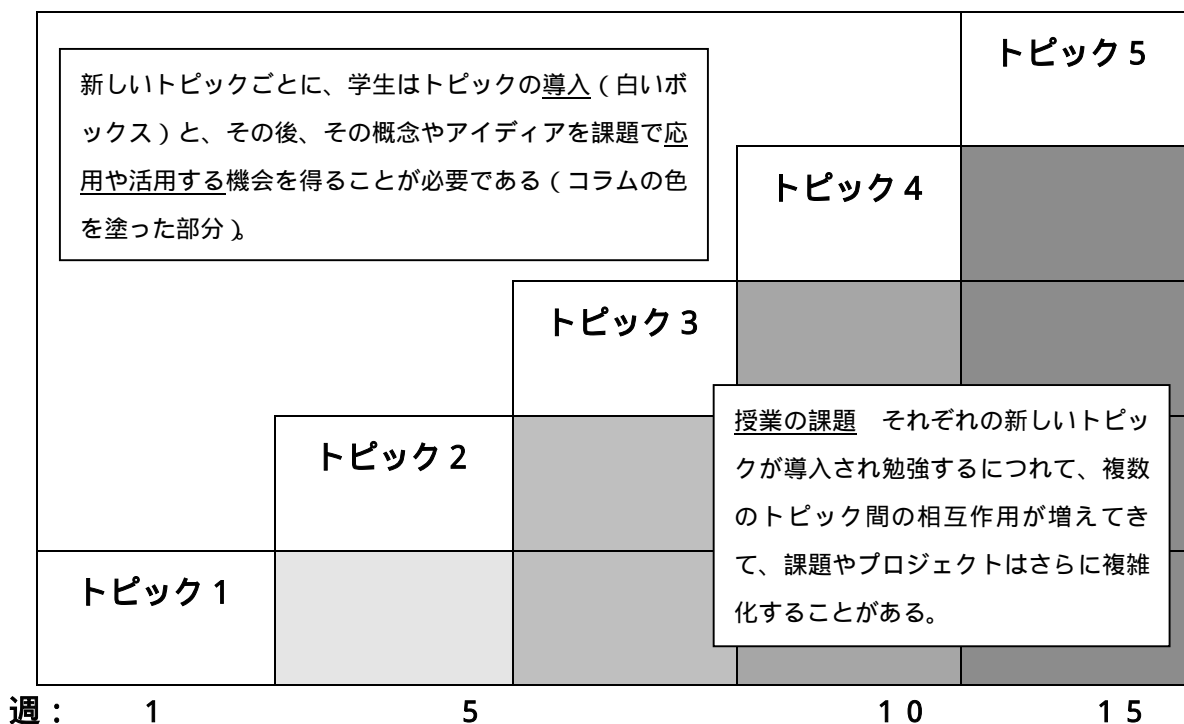
**設計の中間段階(ステップ6 - 8)**  
**主要要素を一貫性のある総体として組み立てる**

授業の基本的構成要素を構築した後、これらの活動を効力ある一貫性のある総体に編成する方法を確定する。これは、**授業構成**を作成し、**インストラクショナル方略**を選択または策定し、その後、**授業構成と方略**を学習活動の**全体計画**に統合することによっておこなう。

**ステップ6 授業構成**

**授業構成**を作成することは、授業の中心的要点である重要な概念、課題あるいはトピックに焦点を合わせて、単純に学期を4～7区分に分割することを意味する。次に、それらの概念やトピックを論理的シーケンスに組み合わせ、各区分に対し何週間あるいは何回の授業を割り当てるべきか決める(図7を参照)。これをおこなう一つの重要な意義は、学生たちにとって徐々に複雑で困難になってくる問題や課題をどのように作成するべきかが、より分かりやすくなることである。

図7  
**授業内容の構成シーケンス**



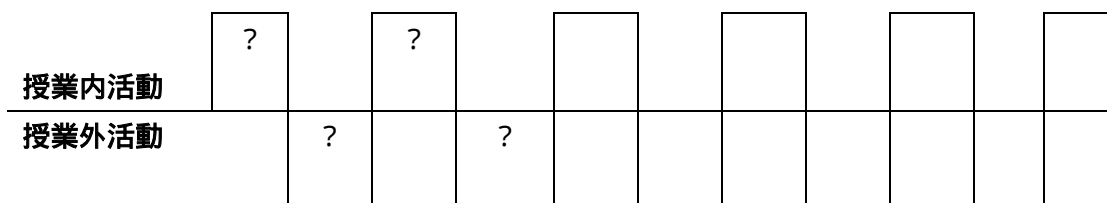
### アクション：

- ・授業の重要な概念、問題点あるいはトピックを4～7選定する。
- ・これらを学生に導入するのに適正な順序（シーケンス）はどうか。
- ・学生がトピックから次のトピックに移行するにつれて、主題の複雑性が増大するのを課題や問題にどのように反映させるか、最初の考えはどうか。

### ステップ7 インストラクショナル方略

指導テクニックとインストラクショナル方略との間には重要な概念的区別が必要である。指導テクニックというのは、個別の特定の指導活動である。講義や討論をリードしたり、小グループ活動を設定したりするのは、すべて指導テクニックである。一方、インストラクショナル方略というのは、学習活動の組み合わせであり、特定のシーケンスにアレンジされていて、学生たちがそのシーケンスを進むにつれて学習意欲が高まり、蓄積されるように組まれている。これにはたくさんの必要条件があるなかで、とりわけ次の (a) から (d) のような活動を設定することが求められる。(a) 学生たちがあとに続く作業に対して準備対応できるようにする (b) どんなことを学生に学習させようとしている場合においても 彼らに実践の機会を与え 迅速にフィードバックする (c) 学生の学業の質を評価する (d) 学生に自分たちの学習を省察させる。このことを分かりやすくするために、次の図で授業内と授業外活動のシーケンスの作成の仕方を示す。この図を私は愛情を込めてキャッスル・トップ・ダイアグラムと名づけている（図8を参照）。疑問符の部分に、それぞれの授業内および授業外の時間区分に当てはまるべき学習活動を定める。目指すところは、それぞれを土台として築き上げる活動のシーケンスを策定することである。

図8 インストラクショナル方略策定のための  
キャッスルトップ・テンプレート

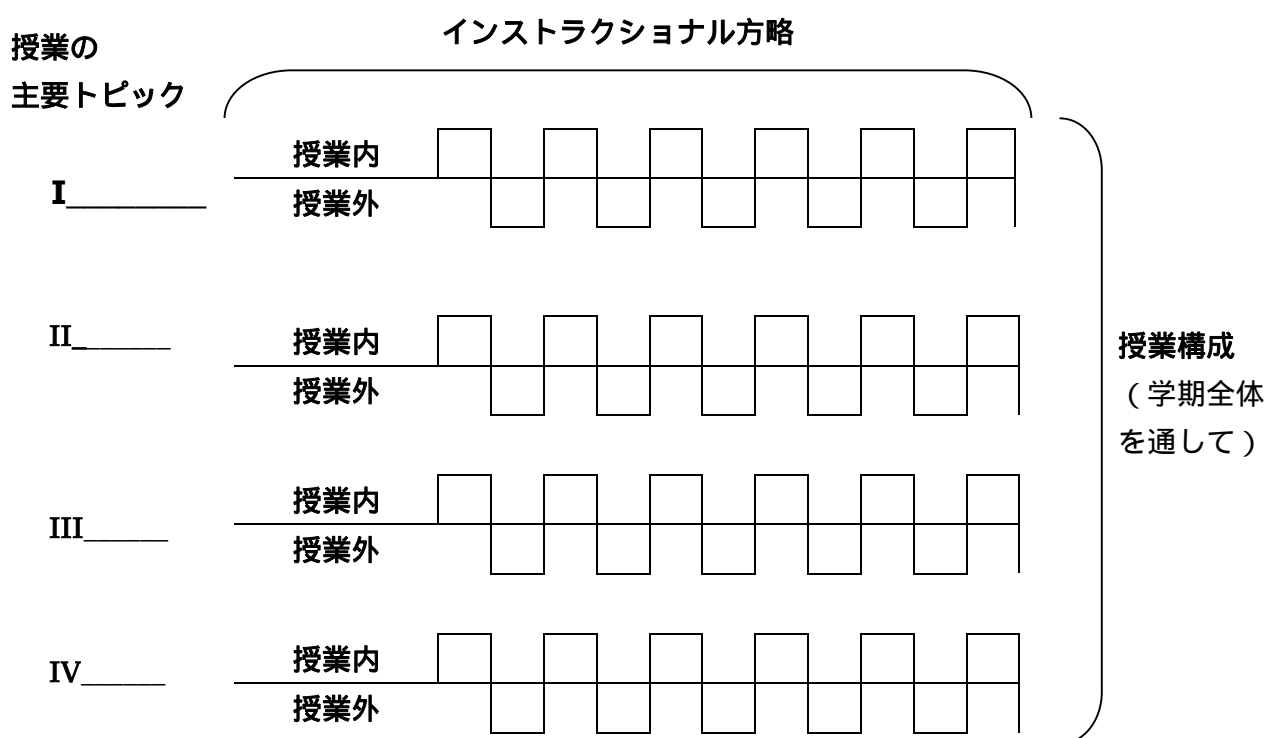


アクション：段階Ⅰで確認した学習活動のいくつかを使って多様な活動のシーケンスを考案する。

### ステップ8．学習活動の全体計画作成

この時点では、授業全体として授業構成とインストラクショナル方略を大胆に統合する必要がある。授業構成とインストラクショナル方略を図示して、その次に、どうすればこの二つの要素が相互に高めあって作用するか方法を探るのが有益と思われる。

図9



上記の図9は、ただ一つの可能性の例を示している。当該授業の条件に合わせて調整する必要があるのは当然である。この図から、優れた授業設計に求められるもう一つの重要な原理を見出すことができる。それは、学習活動の差別化と統合の両方の必要性である。

差別化は、次のような方法で可能である：

- ・日々の学習活動の形態の**多様性**を1～3週間の期間単位で。
- ・授業のトピック I～IV につれて学習の複雑性と難易度の**進展**。  
統合は、各トピックの単位時間の枠内と各トピックの単位を進行していく過程内の両方でおこなわれるべきである。

ステップ8のまとめとして、学期全体を通して、週ごとに活動スケジュールを設定する準備が必要である。次のページのワークシート2がこのスケジュール作成のための書式として役立つだろう。この作業にあたり、次の問題点を考慮すること：

- ・どの活動を最初にするべきか、すなわちコースをどのように**開始**するべきか。
- ・どの活動で仕上げとしたいか、すなわちコースをどのように**終了**するべきか。
- ・どんな活動シーケンスが授業の**中間期**で学習を高める効果があるか。

**アクション**：ワークシート2（次のページ）を使って、授業の学習活動シーケンスを作成する。スケジュールの計画作成で、授業設計プロセスのうち、**設計の中間段階**が終わる。

これで一貫性のある全体として編成した統合された要素の組み合わせができたこととなる。いくつかの追加作業を完成させるべき、**設計の最終段階**の準備ができた。



ワークシート2  
学習活動のシーケンス

各週のセッション(授業時間)

週	クラス	間隔	クラス	間隔	クラス	間隔
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
最終試験/プロジェクト						

## 設計の最終段階（ステップ 9 - 12）：重要な残りの作業

授業設計を完成するには、4つの重要な残りの作業をする必要がある。

### ステップ 9 . どのようにして成績をつけるか

この時点で、成績評価システムを構築する用意ができています。成績は、学習目標および活動のすべての範囲を反映するべきであるが、すべてを評定する必要はないということを覚えておくのも大事なことです。さらに、授業の成績に影響する各項目の相対的比重は、その活動の相対的重要性をあらわすものでなければいけない。

**アクション：**成績評価システムの重要要素は何ですか。

**アクション：**成績の重要要素の相対的比重はどうですか。それを自分自身で決定しますか、それともクラスをこのプロセスに参加させますか。

### ステップ 10 どんな場合に失敗するか

ここで、授業設計の最初の案を分析、評価してみるとにより、デザインを“修正”する。これは何よりも、起こりうる問題点をチェックすることを意味する。例をあげると、次のような点がある：

- ・学生たちは、授業外活動をするための時間があるだろうか。
- ・学生たちは、必要な資料を入手できるだろうか。（例えば、何人の学生が図書館で予約された課題図書を同時に利用しようとするだろうか）

**アクション：**この時点で授業を想定してみると、授業設計にどんな問題が生じると考えられるか。そのような問題を解決するためにどんな手を打つことができるか。

## ステップ 11 . 計画内容を学生に分らせる (シラバス)

この段階でシラバスを作成する。いろいろある中で、次の項目は入れる必要がある。

- ・ 全般的な運営情報 インストラクター、研究室の利用時間帯、電話など。
- ・ 授業の目標
- ・ 授業活動の構成およびシーケンス。主な課題提出期限や、試験、プロジェクトの期日も含む。
- ・ 教科書およびその他の必要な図書文献
- ・ 成績評価の方法
- ・ 授業方針：出席、オナーコード、提出物の遅れ、追試験、など。

**アクション：**授業シラバスにどんな情報が必要と考えるか。

**アクション：**どのような方法で学生たちにシラバスを伝達したいか。紙媒体か、それともオンライン利用か。

## ステップ 12 . 授業の進捗状況をどのようにして確認するか。

授業そのものや指導についての評価を計画しておくことは大変重要である。これは、授業を改善し、長期的に自分の教え方を向上させるために必要な情報や洞察力を得るための唯一の方法である。

これには、次の点に留意すること。

- ・ 学期途中、また学期末においてもフィードバックを回収できる。
- ・ 多様な情報源を活用することが可能である
  - \* 授業中のビデオ / オーディオテープ
  - \* 指導に関する学生の評価
  - \* 学生との面談および / またはアンケート
  - \* 外部のオブザーバー (例：同僚、インストラクショナル コンサルタント、授業に関する学生相談)
  - \* 試験結果

さらに、特定の問題を検討すること

- ・どの程度、授業の目標が達成できたか
- ・特定の学習活動の有効性
- ・学生たちと効果的に相互関係を持つ才能

**アクション：** 授業および自分の指導力を評価するのにどの情報源を利用するか。

**アクション：** この評価について、どの問題に答えようとしているか。

**結論的助言** おめでとうございます。ついにあなたは授業設計を完成しました。最後に考えてほしい忠告が二つあります。

**融通性を持つこと** 覚えておいてほしい1点目は、授業の設計や計画を立てることは大変重要なことではあるが、それは計画でしかない。すべての計画がそうであるように、それを実行する際は融通性を持ち、変更できることが必要である。

**一次、二次、三次の順序変更** 今回初めて、このモデルを使って授業設計を試みるのであれば、すべてのステップや基準に10点の評価を得られなくても、失望することはない。一次、二次、三次の順序変更を考えるのが賢明である。つまり、授業設計を初めて改善するときは、2 - 3の変更に焦点を絞るということである。しかしながら、三つの段階それぞれに、必ず、何か変更を加えるべきである。なぜならば、それぞれが影響し、強化しあうからである。たとえば、強固な主要要素（設計の初期の段階）の変更から考えてみよう。

- ・状況要因をさらに徹底して分析してみる。
- ・学習目標に新しい種類の意義ある学習を一つ加える。
- ・教育的評価を一つ追加する。
- ・新しい種類の能動的学習を加え学生たちを巻き込む。
- ・構成要素が統合 / 調整されていることをチェックする。

強固な主要要素が決まれば、次に、それらをさらに一貫性のある全体へと組み立てる作業をする（設計の中間段階）：

- ・授業の構成を明確かつ簡単にする
- ・差別化した学習活動の組み合わせを作る（図8のキャスルトップ図を活用できる）そして
- ・学習活動の全体的組み合わせのために何らかの計画案を立てる。

一貫性のある学習活動計画ができたならば、残りの作業を完了する(設計の最終段階)：

- ・授業設計に合わせて成績評価システムを調整する。
- ・潜在的問題点を修正する。
- ・授業設計をより明確に示すことができるシラバスをまとめる。
- ・授業および自分の指導力をさらに徹底的に評価する計画を立てる。

教えるたびにデザインがうまくいったか評価する。そして、次に、もう一度、さらに意欲的な変更をおこなう。このようにして、二次の順序変更をし、次に三次の順序変更と続けていく。

改めて、おめでとうございます。前述のように真剣に変更を加えていくなれば、授業設計者として徐々に能力を高めていくことができる。**意義ある学習のための授業設計**に取り組むことにより、他者の質の高い学習体験に責任を負う者として、あなたは能力と有効性を高めることができる。

## 付録

### 形成的フィードバックの7つの原則

出典：『効果的な形成的フィードバックによる学生の学習強化』  
(Enhancing Student Learning Through Effective Formative Feedback, by C. Juwah, D. Macfarlane-Dick, B. Matthew, D. Nicol, D. Ross, B. Smith. Higher Education Academy, York, England. June, 2004.)

- 1 . **学習の自己評価（省察）する力を伸ばすよう促進する。**
  - ・例：学生が課題を提出するとき、彼らにどんなフィードバックを希望するかたずねる。
- 2 . **学習について教員や仲間との対話を奨励する。**
  - ・学習、課題、フィードバックに関して、ミニット・ペーパーを活用する。
  - ・学生たちにどんなフィードバックのコメントが特に有益と思うか例

をあげてもらおう。

- 3 . **どんな優れた学業を目標、評価基準が求めているかを分かりやすくする。**
  - ・ 慎重に構成された基準表や学業レベルの規定を使って、よりよい必要条件の定義を示す。
- 4 . **現状と望ましい学業とのギャップを小さくする機会を与える。**
  - ・ 課題の再提出の機会を増やす。
- 5 . **学習に関して学生たちに質の高い情報を提供する。**
  - ・ フィードバックを事前に定めた基準に関連付ける。
  - ・ 提出後、迅速にフィードバックをおこなう。
  - ・ 長所、短所に関する情報だけでなく、矯正的な助言を与える。
- 6 . **積極的、やる気のある信念や自尊心を奨励する。**
  - ・ 出来の良い課題に良い点数を与える前に、出来の悪い課題にフィードバックによる機会を与える。
  - ・ 記述式課題に対しては、学生がフィードバック・コメントに反応を示してから成績評価をつける。
- 7 . **学習を考案するのに有益に活用できる情報を教員に提供する。**
  - ・ 評価した課題を学生が受け取るときに、彼らにどこが難しかったか指摘してもらおう。
  - ・ 授業時間の終わりに匿名のミニット・ペーパーを使う。

この資料の全文は、オンラインで入手できる：

<http://www.heacademy.ac.uk/resources.asp?process=fullrecord&section=generic&id=353>

(“Download Publication”をクリック)。